

手紙の宛先であるガラテヤの教会の人々は、伝道者パウロの説いたキリスト者の自由について、何をしても神は赦してくださるのだと自由の意味を履き違えていたようです。その結果として、「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもの」（21節）が、教会の内外で横行していたと考えられます。パウロは、それらを自分の欲望を満足させるための「肉の業」（19節）であるとして批判しています。しかし、決して他人事でないのは、多文化の根づいた当時のガラテヤにおいて、そういった「肉の業」がいつの間にか疑うべくもなく慣習化されていたということです。今、良かれと思ってしていること、疑うべくもなく行っていること、個人の権利だと主張して行っていることが、実は、パウロの目から見れば、「肉の業」として映っているのかもしれません。

パウロは、そのような「肉の業」に従って歩むのではなく、「霊」（イエス・キリスト）の望むところに従って歩みなさいと勧めています。しかし、「霊」の望むところは、私たちの欲望と反するものであるようです。両者は「対立し合っているので、あなたがたは、自分のしたいと思うことができない」（17節）とされています。普通、自分のしたいことができることこそ、ストレスのない、人間の幸せにつながると考えます。でも、それが許されるのは、世界に「私」一人しか存在していない場合でしょう。人間は、他者と関わらずして、生きていくことはできません。そして、人と関われば関わるほど、自分のしたいと思うことが出来なくなってくる、そういう不自由さも味わうことになります。例えばそれは、鷺田清一さんの言葉を借りると、「時は金なり」と言われる貴重な時間を、自分のためにではなく、他者に対して注いでいかなければならない不便さを味わうことだといえるでしょう。でも逆に言えば、今の私たちは、他者からその様にして注いでもらった様々な時間が織り込まれて生き得ているのだとも言えます。

「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです」（24節）とあります。無実のイエスの十字架死は、人間が欲望のままに歩んだことの帰結です。自己欲の奴隷になれば、行き着くところ自分の過ち、他者の命の滅びを招くことを、キリストが身をもって明らかにされたということでもあります。一方で、十字架で全てを亡き者とされたはずのイエスの言葉は、古びることも、滅びることもなく、現在もなお人の命を生かし続けています。だからこそ、イエスの望むところに従うようにとパウロは促します。しかし、イエスを信じる者の心は、絶えず、肉と霊が対立し合っているので、自分のしたいと思うことができません。でも実はその中にこそ、主イエスが私達に実らせようとしている本当の「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」（22節）が秘められているのだとパウロは語るのです。

（文責：望月達朗牧師）

